KUMAGUSU WORKS

熊楠works

2021年10月1日

No. 58

題字は熊楠自筆

■発行／南方熊楠顕彰会　〒646-0035 和歌山県田辺市中屋敷町36番地　TEL0739-26-9909　FAX0739-26-9913
https://www.minakata.org／〈E-mail〉minakata@mb.aikis.or.jp

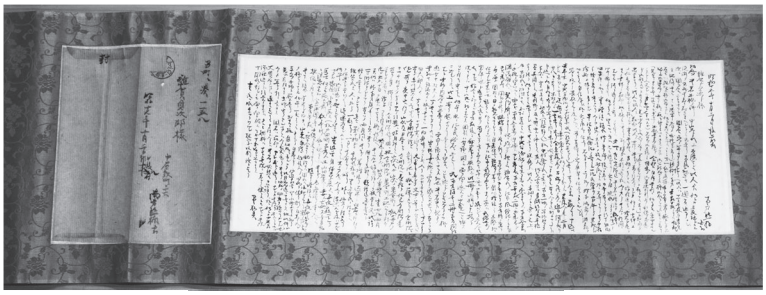
自筆資料に見る南方熊楠…… ㉙

中瀬喜陽氏旧蔵・雑賀貞次郎宛南方熊楠書簡

文／東京都教員　広川英一郎

2021年６月５日～７月４日の期間、南方熊楠顕彰館において行われた、第59回月例展　熊楠とゆかりの人びと第41回「中瀬喜陽」の展示品の一つ、雑賀貞次郎に宛てた南方熊楠書簡について解説をさせて頂きます。

当該資料は顕彰館の名誉館長である故・中瀬喜陽先生が生前に顕彰館に寄贈されたもので、平凡社版『南方熊楠全集』別巻１にも収録されている1941（昭和16）年10月３日付の書簡です。封筒も含めて軸装されており、本文は69行にわたります。中瀬先生が、この貴重な資料を誰もが閲覧できるようにして下さったおかげで、『全集』別巻１の「紀南の風俗編」（401頁14行）の記述が「紀南の風俗記」の誤りであり、「岡茂雄氏に契約済みなり」（402頁５行）が「岡茂雄氏へ契約済みなり」の誤りであることが確認できます。12月に没する熊楠が「民俗学の門人」に宛てた最晩年のもので、熊楠の日記の郵便物の発着記録と照らしてみても雑賀に送った最後の長大な書簡であることがわかり、内容的にも熊楠から雑賀への遺言ともとれる極めて重要なものです。そのためか雑賀に宛てた他の書簡と比べても丁寧な美しい字で綴られており、中瀬先生は幾多の資料の中でも「この字が一番好きじゃ」と仰っていたそうです。その内容は大きく分けて２点に集約できます。



雑賀貞次郎宛・封書（掛軸）（中瀬喜陽寄贈）

１点目は、雑賀の著書を東京の書店から出版する計画についてです。1927（昭和２）年に東京の郷土研究社から出た『牟婁口碑集』は、雑賀が新聞記者として紀南の民俗事例を取材し発表したものを柳田国男が推薦し、熊楠が記事に注を付ける形で出版されました。これに続くものも『南紀の俚伝』と題されて出版が計画されていたようですが、昭和恐慌の影響を受け、1931（昭和６）年になっても実現せず、熊楠が郷土研究社から原稿を返却させていました。熊楠は、更にこの原稿に注を書き加え、1935（昭和10）年に東京の春陽堂や古今書院から出版する計画を立てていましたが実現せず、1938（昭和13）年には『南方随筆』を出版した岡書院へ出版を打診していますが、当時出版業から遠ざかっていた岡はそれを断ります。このように、東京における雑賀の著書出版計画は、熊楠没年の1941年まで足かけ15年も実現せずに難航していました。今回の展示資料の文中では、雑賀の原稿を「紀南民俗誌」と呼び、更に注をつける作業を続けていました。その内容を高く評価しており、岡に紹介されたと思われる書店（岩波？）の示した出版条件に関して「…貴著も当初のものとはよほど進んで増大しおるし、その書肆の最初の取り極めでは貴下に取ってずいぶん不利と思うゆえ、今少しく貴君の利潤になるよう談を進めたいと思う。」と述べ、一流の出版社である中央公論社へ中村啓次郎を介して「余命も知れおる南方最後の圧巻」として、この「共著」を売り込む計画を伝えています。熊楠は、最初に出版の話のあった郷土研究社の社主である岡村千秋（柳田国男の女婿）や、事情があってやむなく出版を断った岡に対しても腹蔵するところがあったらしく、「岡村はもちろん、岡にも面を向け返すに十分なるべしと惟う。」としているところが、なんとも可笑しみを感じるところです。

２点目は、民俗事例に対する扱い方です。雑賀は『旅と伝説』（1941年４月号）に「金剛院と狐」と題した報告を投稿していました。「法螺貝で驚かせた狐に仕返しされる」というモティーフが共通する、田辺の『余身帰』に見える記事と、栃木県芳賀郡の事例を紹介した高橋勝利の記事と、岩手県水沢地方の事例を紹介した森口多里の記事を紹介したものでした。これに対して熊楠は批判的で、「貴著中、親ら巫女や村夫より聞き書きされたことどもは、小生なども毎度読んで面白く感ずるが、いろいろのありふれた書物や雑誌等よりの抜き書きは一向興味をそそらず、人をうんざりさせることのみなり。」と、厳しい書き方をしています。「ありふれた書物や雑誌」の引用に過ぎないというわけです。毛利の言を借りて雑賀には「一事に専念するのあまり、時々跡方の付かぬことを仕出かし、われわれまでも迷惑せしむとのことなりし。」「何とぞ御注意を加えられんことを望む。」と、末期の訓戒ともいえる言葉を残しています。これには雑賀に対しても弁護が必要で、当時の民俗学の研究法として、地域性や時代性を無視して、モティーフが共通する類話を全国的に比較検討する、という手法が主流になりつつありました。雑賀の記事は南紀、栃木、岩手で共通のモティーフが採集されていることを指摘したものですが、熊楠はそれを評価しなかったのです。雑賀は後年、『南紀の俚俗』『紀南民俗覚え書』『南紀民俗控え帖』という小冊子に分けて「紀南民俗誌」の原稿を出版しますが、その前書きに「民間の伝承の採集や、民俗の研究が飛躍的に進展して、ここに収録したことなどは、遥かに後ろの方に押し除けられています。」としています。今日的な視点では、雑賀の著作にはかなり再評価が必要な部分がありますが、一時的な時代の流行の中で自らの著作に対する自己評価は高くなかったようです。

CONTENTS

講演　新発見「牛」腹稿の解読 ― 松居 竜五 …2
講演　「十二支考」の中の牛 ― 簗瀬 ペーテル …4
講演　南方熊楠「奇人」像の形成 ― 野村 さなえ …5
講演　熊楠の食べた牛肉は美味しかったのか ― 志村 真幸 …8
講演　腹稿のさまざま ― 平川 恵実子 …10
講演　腹稿、草稿、覚書 ― 岸本 昌也 …13
講演　腹稿の構造的特徴 ― 田村 義也 …15
講演　文筆家としての熊楠 ― 志村 真幸 …20
講演　「腹稿の世界」〈意見交換〉 松居 竜五 …22
「熊楠」生物覚え書 ㉜ 土永 知子 …27
熊楠日記に見る田辺でのスペイン風邪の流行について 志村 真幸 …28
第60回 月例展のごあんない …29
コロナ下における顕彰事業を振り返る 長瀬 稚春・志村 真幸 …30
新資料紹介 田村 義也 …33
南方熊楠と同級生たち 郷間 秀夫 …36
書簡の杜（二十五） 岸本 昌也 …38
書評・書籍紹介 田村 義也 …40
南方熊楠研究会 夏期例会報告 松下 恵子 …42
国の名勝「南方曼陀羅の風景地」 …44